

# 栃木県 書道連盟 会報

第16号

栃木県書道連盟  
 会長 白石宙和  
 〒321 宇都宮市元今泉 1-17-8  
 TEL (028) 633-4063  
 編集事務局  
 振替口座 00340-3-9017  
 〒321 宇都宮市薬瀬 1-14-15  
 (会計) 増渕春雪  
 TEL (028) 635-3321  
 印刷 宮本印刷 株式会社

## 創立五十周年を迎えるに当たって

会長 白石宙和

五十年と言えば随分遠い昔になる。当時県内には連盟のような県内包括的なものは全くなかったらしい。戦時中、書道報告会なるものが全国各地で結成されていたらしいことが伝わっている。当地でも二荒山神社で結成式が行われたことを何かで読んだおぼえがある。現在に至って当時のことを知る人は殆どいないのではないかと思う。県連盟がいつどのようなイキサツで結成されたかはわからない。当初、斎藤松雲氏や葭田真斎氏が中心になって動いた模様であるが、誰がキッカケを作ったのかは伝わっていない。何れにしても戦後間もない頃で、まだ多くの焼け跡が残っていて会合するにも場所がない有様であった。又会を作っても、そ

れに人が集まれるかどうか全く手探りの状態だったであろうし、現在のようにならぬとも書道熱の昂ぶっている時とは異なっていた。五里霧中と言ってよかつた。當時、顔を出した方々を思い出してみると前記二氏の他に石川木魚氏・川俣古舟氏・中井史朗氏・津久井汀舟氏や、まだ十代だった橋本素碩氏・赤池華洞(当時武井)氏などが浮かんでくる。他に居られた方もあるかもしれないが失念してしまっているのをお許しください。その後どんな手順で進行していったかも定かではないが、当時中井氏が宇都宮女子高に勤務されて居られたので同校の記念館を借りて会合をもったことを覚えてる。或はここで結成発会式を行ったの

かも?。その後いろいろな曲折を経て今日に至ったわけであるが、一つにはこれまで顔を見せたこともない方が一部に担がれて、突然現れたこともあった。又副会長として長い間貢献された日賀野東華氏と宮下竹洞氏のおふた方のご功績については、とくに記して忘れてはならないことでありましよう。又最近になっては、勤め忙しい最中、着実に会の基盤を構築された高橋日儔氏や、十数年の長期に亘って担われ、会員増加に尽くされた七海水明氏については連盟史の上にも光輝を放つものでありましよう。顧問の中井史朗氏は当初から連盟と歩みを共にした功労者であります。ここに五十周年を迎えるに当たり、今後の発展のためにも会員の相互協力と、特に力を身に着けた若い皆さんの健闘を希求いたします。

△平成八年四月済生会西棟四樓にて▽

## 平成八年度会長・副会長

会長 白石宙和



副会長 酒井真沙



副会長 重原聖鳥



副会長 中野永峰



## 平成七年度(第46回)

## 栃木県書道連盟会員展

## 批評会

会期 平成七年五月二十日～二十三日

会場 栃木県総合文化センター、第三・四ギャラリー

批評会講師 赤平泰処先生

(昭二十一年、青森県生まれ、師、中村素堂、大正大学助教授、毎日書道

会審査会員、東方書道院同人・運営委員、貞香会理事・事務局長など)

(講師のあいさつ) 若輩ですが、多少遠慮なく批評してゆきたい。

(中田 婦美氏) 濃墨、字の流れ楽でいい。終筆の処理に工夫を。字の最後になる部分、次の字の脈絡からくると、工夫を。力強く書けている。

(西脇 紫竹氏) 上下のバランスの空間見事。左から右へと斬新な発想。全体的に読むときのバランス、朝の光の部、ゆとりがもてたらしい。線の抑揚の変化いい。(野沢 安喜子氏) 流麗なかなを書いている、なれている。側筆太め、押しつけるところきれいにまとまってくるという。明暗のだし方、下の方にすぎた。

(長谷川 琴泉氏) 全体、左に傾いている。形、流れよくでている。線の力でているが、造形の面白さに工夫を。筆の

使われている部分が同じ。

(平石 秀城氏) 筆の抑揚、全体的に変化を。強さがでている。筆のタッチかたい。かたさを生かす点では落款いい。

出だしいい、この調子で。(古橋 洋舟氏) 濃墨で豪快なタッチでまとめている。二文字、三文字、二文字と意図的に字を切つてまとめてゆく、切れないでハモニーしていくように。流れスムーズに。最後一点心、いい。線、楽に書けて良い。落款いい、本文もこの調子で。(北條 正浩氏) 筆の側筆で右から左へもつていく。あざやか。渴筆、字の大小のバランスもつと楽に、もつと面白くなる。最後の四字さびしい。線が明るくいい。

(細小路 洗玉氏) 隷書、丹念に書いている。もう少し練度、波磔の引き方、楽に。左へゆつ

たり運んでゆく味わいを出したらどうか。少し早い。(宮内 好江氏) かな、流麗、よく表現されている。線の変化と逆筆、「山」「雲」ぎこちない。やわらかいタッチで入るもの、強く次を入れるもの、受けて入るものできたらしい。

(村上 千津子氏) 一字書、紙面全体の中でどの位置で効果を出すか難しい。自然の流れをうまく表現できればいい。筆がついてこなかった。出だしの二画強い深い線いい。

(谷古宇 栖洞氏) 四字横もの苦勞あり。字の特徴よくでている。イメージを楽しく書いている。上部平たい、下縦長、バランスの取り方、墨量の変化と線の太細の変化で表現できればいい。(森山 正子氏) 隷書の作品、蔵鋒の強さをスーッと引いた、全体的

に左から右への統一感欲しい。精細の美ほしい。統一感を表現したい。工夫を。文字の調べ方、正確な辞書を引いてバランスを考えたら。(谷田部 蘭舟氏) 凝縮と広がりの変化でている。「問」「烟」同じようになっている。一画一画の点画曖昧になった。正確な字形の中に変化を。同じ調子に流れてしまったか。(矢野 弓翠氏) 縦長、二行、すっきりと縦の空間美しい。一線のうねり、難しい。墨量の変化をもっと大胆に。もう一つ上の段階にゆける。(山口 英子氏) 紙面、大胆にとらえている。字形をいじりすぎて流れてしまう。心配。停滞、かすれの線いい。(山本 紫苑氏) 白と黒のイメージ、あざやかにでている。墨と紙のバランスいい。筆勢強い。一寸うるさい。もつとすっきりとしたものを。構成いい。扁と旁のバランスを。(吉田 竹溪氏) 線の抑揚の変化、墨量の変化あざやかに表現、見事な出来。落款もう少し省略してすっきりと。一、二行目、よくまとまっている。(吉原 殖子氏) 半切の中で楽に入っている。線にねり、一線の変化など加わってくると

もつと面白くなる。字の崩し方、正確に。続けてゆくことに気を奪われると、はずれる心配あり。(渡邊 竹亭氏) 草書単体の作品、貴重なもの。かすれの部分、線にゆとり欲しい。筆の一つの文字の中で、最後の部の線、古典を見て学んだらいい。(渡辺 輝子氏) 左に墨量豊かに、そして右に広がって行く構成。あざやかに左の方が見える。広がりがもつともつと躍動してゆけばいい。墨色いい。(渡邊 蘭洲氏) 啄木の歌、変化をつけて書いている。「とぶ」たのしい。筆のタッチ、やわらか味あり。歌の意味とよくあっている。出だしの「小」、下の方にもあったらしい。(長





橘 榮峰氏) 出だし、「ほととぎす」ひびきが案、最後のところ「つ」横に動かしすぎたのでひっかかる。構成工夫している、楽しく拝見。(塚原 秀巖氏) 線を切って一つの文字を切って成功している。うまい。もう少し読みやすくしたらいと思う。点画明るく切れあり。(大塚 雅恵氏) 隷書、右の方へ重量感をもってゆく中で、細みの線の味わい、よくでている。萎縮したところをもっとのびやかに。「禁煙」萎縮、工夫を。墨色に一工夫を。(又木 春泉氏) それぞれの文字、紙面の中でよくハーモニーしている。さわやかな作い。逆にもう一

味欲しい。逆をねらったら、爽快なものと、線の沈潜さをハーモニーさせたらいい。ぬいていく線が次へとよくマッチしていくのがわかる。(重原 聖鳥氏) 雄大な隷書、線のねれ、よくハーモニーしている、一線の深み、面白い。大変いい。(白石 宙和氏) 甲骨文のタッチよくでている。明い味わいあり。本文と落款の調和、楽しく表現されている。(斎藤 笙風氏) しっかりと落ちて着いている。静かなタッチ、さわやか。ぬれとがすれ、ハーモニーが美しい作品。(中井 史朗氏) 線のねれ、渴筆、筆のタッチ自然に入っている。字の造形楽しい。のびのびとよく落款、扁の調子でいい。(阿久津 天舞氏) 四角い形多い。墨量の変化とかすれよくハーモニーしている。造形の楽しさあり。表具の色とマッチしている。(赤澤 寧生氏) 若々しい。線がはつらつとした感じであざやか、まとまりもよい。大字と小字とのバランス、大字の中での払っていく線をしていねいに。パターン化しないようにいろいろ工夫したらしい。(新井 幽石氏) 小品、うまい。味わいあり。横もの

難しい。点のハーモニー、工夫されていていい。枯れた感じ、いろいろ工夫してやって欲しい。(荒川 美子氏) 字形、長めにとっていて独得。一、二行に対して三行目、全体的にうまくまとまっていた。出だしの二字、終わりの二字、比べて全体のバランスに工夫を。(荒牧 桂舟氏) 力強い作品。変化ほしい。作品のポイントが下に落ちたかな、中心をどこにすえてゆく、造形的な工夫をすればもっと楽しくなる。豪快魅力的。(伊藤 袖洞氏) 刻字、大変。上に対して下の「掌」の字、変化をもっと出来るのではないか。(飯野 彩心氏) あっさりさわやか、線の力あり、変化あり。深みと抑揚である。いい。(石川 焦山氏) 紙面の中の「馬」、斬新な発想で書いたらいい。線の流麗さをうまく利用したら。点画、空間の処理に工夫を。(石川 澄子氏) 行草、丹念に書いている、変化でている。四行で疲れてきた。線の深さでてくるといい。渴筆の「風」いい。中锋でまとめるのもっと飛躍する。(砂山 公子氏) 表具と作品、よくマッチしている。さわやか、軽快さあり

いい。三行目の雰囲気ももっと巧みにできたらいい。(内田 艸堂氏) 行草二行もの、たたみかけてくる横画と縦画の流れの表現方法だ。縦の流れをスムーズに見せていく。二行目、「雲」から下、一本調子になってしまった。(小川 溪舟氏) 筆使いよくなれている。かすれとぬれ、筆の味わいよくでている。あざやか、点の打ちかたい。「舞」もっと舞っていい、タッチいい。(小川 春彦氏) 全体的にかたさあり、しかしそれが魅力になっている。点を大胆にもっと離したり近づけたりしたら、点の打つ位置うまくいっている。かすれ、深みのある線がでてきたらよくなる。(及川 紫峰氏) 表具も工夫し墨色とよくマッチしている。上の重厚さ、終りのかすれ、あざやか。「吉」重量、「兆」のかすれの表現もっと大胆につけていい。雄大に見せようとしているが、激しさ、終りの力をためて、またスピード感入ったらしい。(生沼 冬情氏) 隷書、真面目によくまとまっている。紙と墨の具合、大事。紙に沈潜していくと深さ表現されてくる。(大島 静彩氏) 篆書、小篆まとまり

いい。書きなれた字とそうでない字、混じっている。縦画のなかでどの線が充実しているか。感情を入れないで、丹念に書いている。(大谷 津芥舟氏) 雄大な冠の書き方で書いている様子がでてるイメージ、訴えてくるものあり。調子が一本線の変化、もっと出てきてもいい。紙面の中の広がり巧みにでている。(太田 初穂氏) 墨色がやわらかい感じのもの、四文字のハーモニーが大事。三文字目の「神」、「一」と「三字」の全体との流れ、ハーモニーどうなのか。異質なものがでないようまとめたかどうか。(乙川 玄洞氏) 一行もの、上から下への流れ大切になる。形、ゆったりと構えていて面白い。盛りあがり少しでるとより一層いい。「樹」いい、「遅」一工夫を。(嘉久和 尚道氏) 墨色うまくでている。「来」のかすれの部、ポイントになる。工夫を。(加茂 泰玄氏) 濃墨の聯もの、一文字、一文字あざやかにでてる感じが必要だ。渴筆明るい、ぬれとのバランス、調和を。もっと飛躍してくる。(菊地 継舟氏) 縦の流れあざやか、いい。墨量いい。穂先が見えすぎる。

鋒をかくす筆法を学ぶといい。かすれの中にねれた線を工夫したらしい。(吉高神 喜美氏) 臨書、縦画のまとめ方いい。安定している。途中でかすれないように。作品から離れた臨書を。「はね」熟したりない。もっと堂々と。(窪田 連峯氏) 半切で大人しくまとまっている。崩していく文字が曖昧になっている。バランスを。出だしの「空山」いい。下部気がぬけている。全体をまとめていくように。(倉田 華苑氏) 作品全体明るい感じ。穂先をきかして書いている。はじめの三文字に対して終りの三文字のまとめ方、最初と最後、重要である。流れを学んで欲しい。(黒須 圭助氏) 堂々と書いている。一行もの、上と下のバランス調子をとらえてほしい。(下司 香雪氏) なれた筆のタッチで紙と墨色あざやか、でている。だいたん、まとまりいい。のびやか。この調子でいい。つつこみぐつとくるものがほしい。(小林 正韻氏) 抑揚、全体の明るさ、うまくでている。線の深みうまくいっている。四字のハローニー、難しいところ、一字一字は楽しい、終りの線、工夫を。

(小森 聖子氏) めれと細い線のタッチ、面白くでている。墨量、少ないところ弱くなっている。一工夫を。(古口 庸子氏) 羊毛、線ののびやかさあり。明るい。大きい部、もっと躍動していい。もっと大胆に書いていく筆法を。(後藤 邦舟氏) 三行もの、明るい感じ、面白い。軽快に流れすぎないように。逆筆、所々に入りつつけられるといい。(佐藤 紫香氏) 三行もの、草



書の多い作品。一寸かすれてくるのが早すぎ、脈絡を大切に、字形をまとめていくことが必要になる。もっと大胆に、大らかに。(左川 青嶺氏) 篆隸風、楷行、まとめ方うまい。細味の線、字形のなかでハローニーしている。横の全体のバランスもつとできていい。(斎藤 希堂氏) 紙面の中で楽しくまとめている。ぬれとかすれの調和難しい。印の位置、斬新。「無」の処理の仕方ユニーク。ぬれとかすれもう一つ入ってくると楽しいものになる。(吉田 景堂氏) 非常に淡白な作、字の脈絡、自然に見せている。紙面の中での流れあり、味わいある。(増淵 春雪氏) 「ろ」の丸い空間、面白い。旁どうかな、終りの線に工夫を。筆のタッチ終りの部にほしい。(村田 幽香氏) 抑揚、うまくでている。細筆いい。筆が達者に動いている。印の位置はこれでどうか。(館沼 天游氏) 大篆をうまく書いている。直と曲のハローニーいい。紙面の中でそれぞれ喧嘩している。墨量の部に一工夫を。(小森 梅寿氏) 腕がよく動く、墨の色いい。動きすぎている。押さえてもいい。(高梨 峰

鶴氏) 横もの、明るい。紙と墨のハローニー、よくいっている。個々の広がり、行間いい。(早乙女 晃楓氏) 羅紋箋、紙面の中できっちりおさまっている、楽しい。同一の線があるので大胆に変化を、腕で広がり。(佐藤 堪氏) 広がりある。縦の線きいていいる。ゆったりとうねる線多すぎ。(小滝 きみ氏) 上の空間、下の空間、うまくまとめている。渴筆いい。すんでいて細めの線、中鋒でひかれてひびきあり。(兼目 悠久氏) うすい墨をうまく使っている。ゆったりと躍動感あり。上二文字、下二文字、わかれていいる。渴筆の処理の仕方に工夫を。(桑生川 天遊氏) 明るい。テーマがあるようで珍しい構成。起筆、軽く見えない。出だしのかたまりに対して終りのかたまり窮屈。墨量を少なめにしたら面白かったろう。(川合 義山氏) 文字を読ませて、それぞれの字にわきとの調和あり面白い作品。終りの部、情感あり。(久津美 碧洋氏) 力強さ、流麗な流れ、うまくでている。筆が達者すぎ流れすぎないように。練度のある作品。(大谷津 紫水氏) 線の深み、非常にうまく

でている。「光」の点の位置、工夫された、苦労したのでは。二文字のハローニー見事。(大塚 清岳氏) 瀟洒な花草の作品で肩張らずに見られる、楽しい。筆が達者。終りのまとめ方いい。(若澤 松濤氏) 上と下、両方とも張り切りすぎ。一本の線のぬいてゆくところ、押さえ気味に書いてゆくことが大切。(石川 六濤氏) 大胆なまとめ方でポイントがありがたい。上の方だけ目がいつてしまふ。遊印いい。「閑」「幽」ならんでしまった。(新井 幽石氏) 情緒あり、面白い。線が澄んでいる。「鳴」、鳥の造形感覚面白い、いい。あまり崩しすぎてわきの線の処理の仕方、目にうつりすぎないように。(荒井 雅子氏) よくなれている。終りのまとめ方、面白い。線、きびしいものあり。この調子でいい。(赤澤 豊氏) 縦線のアザやかさ、墨のぬれ、流麗に流したところ自然でいい。行草、典型的いい。(齋藤 松峰氏) 線のかすれでていないのでややかたくなった。画数の少ないもの、小さくもっと楽しく書けた。(坂本 華仙氏) さらっと書けている。作品真面目、線の抑揚の変化を。出だ

し六文字あっさり、二行目うるさい。(酒井 導子氏) 横画のかすれ、明るく見せている。漢字の懐の広さに対し、かなの小ささ、面白い。行が同じ調子になったか。墨量とスピード感の抑揚を。(三本木 英雲氏) かな、一行、二行の流れ面白い。調子が一本調子、流しすぎ、少し押さえたら。スピード感を入れたら。(篠原 松情氏) 二行もの、清楚、真面目にまとまっている。落款の位置、半文字さがいい。墨がへってきたときの処理の仕方を工夫せよ。墨量の豊かなところはいい。(柴田 栄子氏) 長い文、素朴、まとまりでている。よみやすくする工夫を。(洪沢 美代子氏) ぬれとかすれよくでている。筆の動きが闊達、紙にくい込んでくるといい。かすれの軽快感とぬれの重量感がハーモニーしてくる。(島田 雄泉氏) にじみでいて面白。小さな字のところ、こちよこちよと見えてしまう。小さな字でも懐、広がりのある書き方を工夫されたい。(菅谷 實真氏) 楷書、堂々と書いている。もっと横画を直線的に引いたらどうか。それる線が入ってもいいのでは。

逆筆のつつこみあるといい。濃淡がでてくる。(鈴木 清氏) 淡墨、ひろがりだ線、朴訥、もっと流麗な線が入ってくれば楽しいのではないか。(鈴木 光峰氏) 縦の流れがあざやか。字それぞれ点画の方向性がいい。文字の懐、きりつとまとまっていて広さがあるというところも工夫してみては。落款しつこい。(鈴木 小菟氏) 横もの、ゆったりかまえていて、ゆとりのある作品である。引きしまり、盛り上がり、起承転結あるといい。落款かたい。(鈴木 博味氏) 広がりありいい。筆が立って線が澄んでいる。かすれ縦もつとできていい。(鈴木 碧翠氏) 三行もの丹念に書いている。線が浅い、線のつつこみ、逆筆の使用法を。全体的にいい。(鈴木 蓮徑氏) 全体的に二行統一感が必要。横の線の引き方、深みがない。(関 平峰氏) にじみの表現、細味の線、楽しさでくると見事になる。あまり軽快に流れないように。(関口 恵美子氏) 小篆を丹念に書いている。縦線、深味のあるものが引けてくると面白くなる。かすれを減らし、潤筆を。(関 谷 光舟氏) 三行かな、二、

三行連綿少ない。流れかたくなっている。「人能」やわらかさを。(田島 竹研氏) 淡墨で強さを出すのは難しい。どこかほつとする部、あつていい。力一杯もいいが、ゆとりほしい。(田名網 萬静氏) 隷書、左側の払い充実してくるといい。全体のハーモニーうまくいっていない。(高瀬 京子氏) 懐、広い、伸びやか、ぬれたところの抑揚の変化がでてくればいい。(高橋 雅子氏) 縦画の失敗か、成功か。直と曲線のハーモニー、これからの工夫が必要。あまりメニューをとりすぎないで。(高山 華峰氏) すっきり縦画強調して書かれている。穂の先をかくして書くように工夫すると変化がうまくでくる。(竹澤 麗舟氏) よませるといふ左の方へだんだんといった流れ、まとまりうまくいっている。底辺の部、処理の仕方いい。線もすんでいい。(塚原 知子氏) 臨書、もっと強く書いていいのではないか。広がりあり、ゆったりしている点がいい。線の鍛え、ぬれの部、充実している。潤渇に工夫を。(土屋 紅雲氏) 二行もの、強い線が入っている。抑揚の変化よく表現できてい

る。出だしかたい。(鶴見 芳花氏) 案に運筆している。線の太細の表現いい。後半見せてくれる。タッチ見事。(豊田 典舟氏) 力強いタッチで書かれている。ゆとりのある形態の取り方を工夫したらいい。行書の部かたい。

(講師、終りのことば)  
的をえた批評ができたか不安です。中央にないいろいろな書風にふれ、お互い競い合っ様々な書風があり、勉強になりました。批評は、はずれ、あたり不安ですが、これからのご精進を願っています。ありがとうございます。

(文責 大谷津紫水)



連盟古舟賞



連盟賞を

受賞して

酒井導子

この度は思いがけず連盟賞を受賞させていただきありがとうございます。

近代詩文書に取り組み始めて二十年、やっと創作の楽しさがわかってきた半面、自分の描きたいイメージを作品の中になかなか表現しきれず未熟さに悩んでいます。そんな折りのこの受賞は私を大きく勇気づけ、励ましてくれました。

これからも自分の書求め、努力していきたいと思えますのでよろしくご指導下さいますようお願いいたします。

連盟古舟賞をいただいて

鶴見晨蒲

このたび、思いがけず連盟古舟賞をいただくことができましたことを、心よりうれしく、また、恐縮に存じております。

これもひとえに、日頃ご指導をいただいております多くの先生方のお蔭と、心より感謝申し上げます。

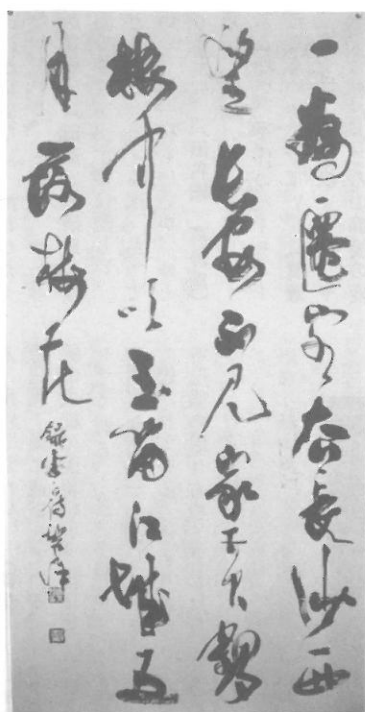
今回の作品は、普段より小さめの一寸の印材を用いました。そのため肩の力がぬけ、言葉のイメージの中で仕事をする事ができたような気がします。自己主張をする強さがない代わりに、方寸の世界に遊ぶ雰囲気のでたのかも知れません。本当に有り難うございます。



連盟賞を受賞して

久津美 碧洋

子供の頃から習い始めてこの歳( )になるまで、ずっと続けてきた書の道。振り返ってみると、牛歩の様な歩みを、よく飽きもせず続けてきた「歩け」「歩け」「歩け」と勇



「作品は作者と共にあり」という古人の名言がありますが、亡師宮下竹洞先生の「美しい書を書け」「人間性を磨け」という生前の教えが、今更ながら耳に残ります。これからも頑張ります。よろしくご指導下さい。

# 赤平泰処先生をお迎えしての 実技講習会

松 本 宜 響

本年度の実技講習会は二月十八日の日曜日、栃木県総合文化センター三階研修室で開催されました。この日は関西関東一円に及ぶ大雪。朝起きると一面の銀世界です。事務局長赤澤先生から電話が入り講師先生が来られるだろうか、会員からは足が確保できないので欠席するといふ連絡がかなり入ってきた。開催することが難しい旨の内容でした。しかし、どんなに少人数でもとにかく実施するしかない、ということでお互いおそろおそろ会場に向かうこととなりました。ところが案ずるより産むは易し、でしうか九時三十分も過ぎる頃には六十名近くの会員が集まり開会の時刻十時には約九十名に増えて丁度良いくらいの人数になりました。改めて書道連盟の会員の皆さんの真摯な学書態度にうたれ、そしてまた大変嬉しく有り難く思ったものでした。癸生川天遊先生司会のもと十分ほど遅らせて開会。連盟会長白石宙和先生のご挨拶そして松本による講師紹介さらに赤平先生の講義へと進んで行きました。赤平先生には平成七年五月に開催された連盟展の批評会にも講師をお願いし、その際は非実技も指導して戴きたいという要望が強くその声に応えて今回実現の運びとなった経緯がありました。先生は青森県弘前市のご出身。大正大学卒業、現在貞香会事務局長、東方書道院運営委員、毎日書道展審査委員、大正大学助教授を務められています。その書風は書道誌などの紹介によると「漢字五体特に篆隸を中心として楷行草の樹立に心を掛け、古典的な秩序と気品を保つ現代的で一際光を放つ。」と評されています。

今回の講習では隸書の臨書をお願いするということで礼器碑を取り上げられました。



講義では準備された臨書作品を黒板に掲示され恩師中村素堂先生との出会いや臨書の意義、方法そして隸書や礼器碑について順に話をしていたいただきました。特に印象に残ったのは、「古典を学ぶときは気をつけなければならぬのは、自分の求めている書の美と異なるもの、あまり好きでないものに注目することだ」と思う。それは自分自身にないものを持っているからである。自らの書の長所はより好きな古典を見つけて学ぶことによって一層の磨きがかかり個性的になるだろう。しかし、客観性も必要で肌が合わないといつて否定するのではなく、そんな古典にも目を向け理解していくことが必要だろう。そしてそれは行草の作品を創るときに篆隸の古典を学ぶことによってより表現が多様に深みが増してくることにもつながる。」という臨書更には礼器篆隸を学ぶ意義に関するものでした。続いて会員の臨書作品の添削を昼食を挟んで午後二時までしていただき、最後に作品揮毫の実際を見学させていただきました。「思無邪」「観自在」「室春風蘭氣」等々堂々たる篆隸作品の運筆に女性会員の一人が「とっても素敵だった」と魅せられたように話して

## 栃木県書道連盟

### 研修旅行に参加して

栃木蘭契社 澤 田 幽 石

猛暑続きの七月二十三日二十四日と一泊二日で、今年は山梨方面に夏期研修旅行が行われた。白石会長のお見送りを受け、一号車二号車、七十余名の出発である。私たち栃木蘭契社も七名の参加があり、大門碑林に心を馳せる。車は順調に走り一路山梨へ……。昼食に「ほうとう」なる食物がでてきて大さわぎ。午後一時三十分、予定通

り山梨県立美術館到着。開館昭和五十三年十一月三日とか、岩波の本のマークでおなじみのミレーの「種をまく人」と御対面、程よい照明と空間で、しばしバルビゾンの世界へ……。ミレーの「夕暮れに羊を連れ帰る羊飼ひ」コロの「大農園」クールベの「川辺の鹿」などなど。すっかり虜となり、想い人と逢ったような名画鑑賞は一時間程で

ていたのが、この日の講習を象徴していたように思いました。

アカデミックな中に情熱的なものを内蔵する先生の書、そして会員が次々に持つてくる作品を添削する熱心なご指導に参会者一同大いに満足して会を終えたように思います。

終了後午後四時から五十名の会員が参加し講師先生を囲んでの懇親の宴が持たれ、これまた和やかな中に意義ある集いとなりました。

は少々物足りなかった。がすがすがしさと充実感を味わう。そしていよいよ大門碑林公園到着。

約五年の歳月をかけて、中国でもっとも著名な西安碑林と曲阜碑林の名碑、後漢(西暦百五十六年)から唐(西暦八百四十二年)までの十四を当時のままに復元し、自然の丘陵に見事に配置している。曹全碑、九成宮醴泉銘、孔子廟堂碑、雁塔聖教序他これらの碑は、書学者は必ず学ばなければならないものばかりである。炎天下に平塩岡の段々道は、細身の小生には少々こたえたが、自然と人、歴史と文化の岡に深くのめり込んで行く。ガイドのおじさんの説明の聲と、蝉の声とがハモって汗だくの身体に心地よい響きであった。閉門ぎりぎりまで見学して、本日の宿、下部温泉へ。午後六時三十分、和気藹藹のうちに懇親会が始まり、今日の成果を話し合ったり、抽選会の賞品に大騒ぎ。小生も短冊掛が当たり良い記念となる。飲むほどに酔う程にカラオケも飛び出し、自慢の、のどを御披露する者ありで大盛況。解散後も話はずみ寝るのを忘れる? かくて下部の夜は

更けていく……。二日目は、中富町の「山一和紙工業」へ。四百年の伝統ある西島和紙の製法工程を見学する。もっとも関係の深い画仙紙だけに、皆の眼、輝いていて鋭い質問も飛び出す。見学後、一枚たりとも無駄にはできないと誓う。そして甲府市の「印伝屋」へ。特別のはからいで、鹿の皮をなめし漆を塗る細かい作業を見学することができた。ただただ根気強さに感心する。昼食はぶどう棚の下でワインとバーベキューを堪能する。さすが山梨ならではのことで。全員満腹? 続いて勝沼町のワイン工場「白百合醸造」見学。ワインの醸造過程を見学。ここの貯蔵庫は、一〇〇〇本のワインおよびプライベートワインを貯蔵できるとか。そして庫の材料はオーストリアのウィーンの歴史的建造物に使用されていたレンガが、五〇〇〇〇個使用されているという。試飲コーナーで二種類試飲できる。もうごきげんである。高遠な歴史あり、文化



あり、美あり、まことに有意義な二日間でありました。最後にお世話下さった先生方に深く感謝申し上げます。そして出来事の万分の一もお伝えすることのできない拙い文章をお詫び申し上げてペンを擱きます。ありがとうございます。

## 第十三回女流展

会期 平成八年二月二十三日～二十五日  
会場 県総合文化センターギャラリー

春の足音が聞こえるかと想うと季節はまだ浅く、三寒四温の二月下旬第十三回女流展が開かれました。

女性会員三百七十七名中、おおよそ半数の百五十七名の参加があり、昨年に比べて四〇点増の飛躍的な伸びがありうれしく存じます。全紙作品も今までになく多く、男性会員有志の方々のご協力をいただきました。小ぶりな作品は二段掛けにするなど工夫をされて効果的な展示となりました。

作品の傾向は女性らしく、かな作品が多く見られましたが、楷・行・草・篆・隸・篆刻・近代詩文、調和体など多岐にわたり、それぞれの持ち味を発揮して、色彩も豊かなバラエティのある会場となりました。数年前までは殆どが漢字(行・草)かな作品であったことを思いますと、書を愛する方々の勉強の幅の広がっていることを大変心強く感じました。ご来場の

先生方からも、女性の意気なかな旺盛だ、とのご感想をいただきました。

最終日には、暫く途絶えていた批評会を、中井史朗先生をお迎えして行われ、六十名ほどの方々が熱心に聞き入り、これからの書活動に一層の意欲と充実感を与えられましたことは有難いことでした。

ご講評を要約させていただきますと「書はあらゆる芸術の中で、修正のきかぬ一回かぎりで表現する芸術である。それだけに『氣』が第一。氣を入れた作品を書いてほしい。」「基礎の学習として古典を学ぶことをおろそかにしてはならぬ。制作にあたっては、素材としての言葉の持つ意味を理解し、自分の情熱で表現するよう、また曲をつけたらどうなるか、等を考えるのは大切なことだ。」「出品作のなかで、自作の詩『鎮魂歌』を書いた作品にはもっとも心打たれた。痛切な情が



作品全体にひびいている。」  
などなど。

参加者一同今後の自分の作品づくりへのご指導と受け止めて、質問などもできて二時間は熱気のうちに有意義に終わることができま

した。

ご来場の七海先生からは、かな作品などは自作の短歌、俳句を書くのがよいのではないかと、ご意見をいただきました。自分の思いを込めた作品づくりに大切な今後の

課題と思います。

会期中は幸にして晴天に恵まれ、七百余名の入場者があり、ご来場をいただきました先生方からは、温かいお励ましやご指導を賜り、又、書をなかだちとしての出逢いや、旧交をあためるなど、これを一つの出発点として、新たな心を燃やしてゆこう、との思いを抱いて盛会裡に終了することができました。

沢山の方々に支えられ、応援していただいた第十三回女流展でした

ご協力をいただきました皆様のご厚情に心より感謝申し上げます。

(人見翠苑記)

## 国文祭書道展

「やさしさの森を世界に」をメインテーマに、文化の祭典第十回国民文化祭・とちぎ95が平成八年十月二十七日から十一月五日まで開催された。

国民文化祭は一九八六年にスタート。各地の文化のすそ野を広げ、水準を高めてき

た。

主催は文化庁と各県が持ち回りで開くため、「文化の国体」と呼ばれる。三浦朱門・作家で元文化庁長官が提唱し、東京都で第一回大会が開かれた。

栃木大会は記念すべき十回目という節目で、県内の十二市十町の四十五会場が様々な催しが開かれた。県は二十四億円をかけて四年がかりで準備を進めてきた。

美術展は「とちぎ発 美のメッセージ」で、日本画、洋画、工芸、書道、写真の五部門からなる事業別企画員が平成五年構成され、岩手県への視察、応募規定(一人の出作品点数、規格、費用、搬入搬出期間、審査員の選出)リアル方法、会場設営など県準備室での会議を数十回重ねた。

書道部門では、特に応募作品をどう集めるか、先催県を上回りたい、入選作を多くした場合の掛け替えをどうするかで検討を重ねた。

出品状況は次の通り。  
漢字 二七七点  
小字数 五三三点  
かな 七一点  
漢字かな交じり 三八点

篆刻 一八一点

刻字 一点

前衛 三点

計 六二八点

県内四四〇点、県外一八八点であった。

鑑別、審査は五部門(刻字前衛は合審)ごとに行い、作品を繰返し見るといいう慎重なものであった。入賞決定については、成瀬映山先生を審査長に全審査員で、賞候補作(各部門から三倍選出する)を審査された。候補作は甲乙つけがたく入賞決定は難航された様子であった。

審査終了後、先生方は、本県のレベルの高いこと、若い有望作家がおり楽しみであること、古典の勉強は大切なことなど話された。

本県の入賞者は次の方々  
文部大臣奨励賞 津久井加門  
国文祭委員会賞 渡辺 輝子  
県実業会長賞 鈴木 源泉  
県教育長賞 阿久津天舞  
宇都宮市長賞 澤田 幽石  
宇都宮市教育長賞 塚原 秀巖  
国民文化祭が成功した裏には県準備室の方々の並々ならぬご苦労、会場フクダヤ催示場の方々のご尽力に深く感謝の意を表する次第です。  
(重原 聖鳥)

大浦氏

## 県文化奨励賞を受賞



### 受賞の言葉

大浦 舟人

この度の県文化奨励賞受賞に際しましては、県書道連盟の役員の先生方をはじめとする多くの方々よりご丁寧なるお祝いのお言葉を賜り、深く感謝申し上げます。

深奥なる篆刻の学途にある私がこの様な栄を得たのも、本県書道連盟が今まさに五十周年を迎えんとするこの時機の追い風を受けたからに外なりません。更に、今回の受賞が、県内の多くの若き書作家達の可能性を展げる契機になればこれにまさ

る喜びはありません。これからの向上の気概の萎えることのない様、精進する所存ですので、どうぞご鞭撻の程よろしくお願いいたします。



大浦先生の

### 受賞を祝す

吉田 景堂

この度、大浦舟人先生が篆刻において県文化奨励賞を受賞された。県書道界の快挙であり、同じ書を志す仲間の一人として慶賀に堪えない。彼とは大学時代からの友人であるが、当時から才気光るものがあり、書への熱き情熱と高い志を抱いていた。彼の最大の特長の一つは飽くなき向上心の人であることだ。漢字を自分の生涯のテーマと定めてからは、小林斗盦先生の門を叩き刻苦勉勵研鑽努力を重ね、めきめき頭角を表し今日の受賞に至ったのである。もちろんご夫人の支えがあったればこそである。

さる三月十七日、ホテル丸治において盛大に祝賀会が催された。県書道連盟、県高校書道部会、県篆刻連盟の三者共催で行われた。会場の関係で各役員までしかお呼びできなかったが、彼の所属する三つの団体のご協力を得て

開催されたのも意義あることであった。

知事夫人はいにくの所用で欠席されたが、小林宇女高校長、大橋県文化協会事務局長等、ご来賓のご祝辞の後、

## 故齋藤笙風先生を悼む

七海 水明



「墨のこころ」の21頁を開いて、先生の笑顔を眼にして、何故このような方が、こんなに若くしてこの世を去らなければならなかったのか、世の人の病をなおし続けてこられた方なの

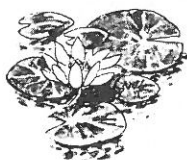
に。運命の二字では片づけられない悲しみの極みである。

「ただ書くだけでなく。」の実践者として立派に美

大浦先生の謝辞、ご家族紹介と続き、多くの参会者の中、楽しい宴となった。今回の受賞を糧とし大浦先生のいっそうのご活躍を祈念したい。

しく生きつつあった先生。浅香鉄心師の高弟として本県に栃木蘭契社を創設しその充実発展に、熱意活気に満ちたリーダーとして、また、本県書道連盟副会長、栃木県文化協会理事等をつとめられ、書家としての羽ばたきは誠に大きかった。この笑顔に対し、「しっかりとやって行きます。」と固くお誓いいたします。

先生の御冥福をお祈り申し上げます。



|    |   |                                                                                     |
|----|---|-------------------------------------------------------------------------------------|
| 十一 | 五 | 書道部門 F K D 福田屋 ショッピングプラザ都宮店<br>内容については詳細別記                                          |
| 十一 | 三 | 第十回国民文化祭入選者のつどい<br>会場 ホテル丸治                                                         |
| 十二 | 四 | 出席 一六八名<br>第2回幹事会 出席 十五名(女流役員含)<br>○実技講習会内容確認<br>○第十三回女流展の打ち合わせ<br>○故齋藤笙風副会長の後任について |

## 平成7年度 決算報告書

## □収入の部

|         | 予 算       | 実績予算      | 備 考                      |
|---------|-----------|-----------|--------------------------|
| 会 費 収 入 | 2,700,000 | 2,607,000 | 5,000×540名→519名・4,000×3名 |
| 利 越 損 失 |           | 3,200     |                          |
| 繰 越 損 失 | △ 12,836  |           |                          |
| 計       | 2,687,164 | 2,610,200 |                          |

## □支出の部

| 項 目       | 予 算       | 支 出       | 増 減     | 備 考           |
|-----------|-----------|-----------|---------|---------------|
| 総 会       | 150,000   | 153,350   | △ 3,350 |               |
| 展覧会       |           |           |         |               |
| 会 員 展     | 470,000   | 492,126   | △22,126 | 会場費・謝金・印刷・その他 |
| 女 流 展     | 170,000   | 165,197   | 4,803   | 会場費・印刷・その他    |
| 会 議       |           |           |         |               |
| 顧問・参与会    | 100,000   | 89,146    | 10,854  |               |
| 運営委員会     | 140,000   | 140,148   | △ 148   | 2 回           |
| 幹 事 会     | 200,000   | 185,298   | 14,702  | 4 回           |
| 研 修       |           |           |         |               |
| 実技講習会     | 370,000   | 365,140   | 4,860   | 会場費・謝金・その他    |
| 研修旅行      | 100,000   | 60,641    | 39,359  |               |
| 50周年記念積立金 | 150,000   | 150,000   | 0       | 平成6年度より       |
| 会 報       | 150,000   | 125,893   | 24,107  |               |
| 通信印刷      | 500,000   | 493,999   | 6,001   |               |
| 雑 費       | 100,000   | 126,550   | △26,550 |               |
| 予 備 費     | 100,000   | 12,836    | 87,164  | 前年度繰越損失       |
| 合 計       | 2,700,000 | 2,560,324 | 139,676 |               |

## □決 算

| 収 入       | 支 出       | 小 計           |
|-----------|-----------|---------------|
| 2,610,200 | 2,560,324 | 49,876        |
|           |           | 93,000 会費未収入分 |

計

49,876 (来年度繰越分)

## 平成8年度 予 算 案

## □収入の部

2,950,000 円 (5,000 × 590名)

前年度繰越

49,876 円

## □支出の部

|           |   |           |
|-----------|---|-----------|
| 総 会       |   | 150,000   |
| 展覧会       |   |           |
| 会 員 展     |   | 500,000   |
| 女 流 展     | ※ | 170,000   |
| 会 議       |   |           |
| 顧問・参与会    |   | 100,000   |
| 運営委員会     |   | 140,000   |
| 幹 事 会     |   | 200,000   |
| 研 修       |   |           |
| 実技講習会     | ※ | 370,000   |
| 研修旅行      |   | 100,000   |
| 50周年記念積立金 |   | 150,000   |
| 会 報       |   | 130,000   |
| 通信印刷      |   | 500,000   |
| 会員名簿      |   | 380,000   |
| 雑 費       |   | 9,876     |
| 予 備 費     |   | 100,000   |
| 計         |   | 2,999,876 |

※女流展・実技講習会は50周年  
事業準備のため休みとし、そ  
の予算を50周年事業に充てる。

■連盟に新入会の場合は、  
年会費5,000円に入会申  
込書を必ず添えて、事務  
局または会計にご送金下  
さい。次年度からは郵便  
振替送金となります。

## お知らせ

平成九年度は栃木県  
書道連盟が五〇周年記  
念の年となり、左記の  
記念事業を計画してお  
ります。その節は会員  
各位のご協力とご参加  
をお願い致します。こ  
のご案内は本年秋頃に  
なる予定です。

- 記念会員展
- 記念講演会
- 記念誌発行(記念  
会 員 展 図 録 含 む)
- 記念研修旅行
- 記念祝賀会

☆これから連盟に入会  
希望される方で、五  
十周年記念事業に参  
加したい方は、準備  
の都合により平成八  
年九月三〇日まで  
に入会申し込みを  
下さい。これ以降に  
入会の方は記念事  
業の参加を不可と  
させていただきます  
ので、ご協力のほ  
どよろしくお願い  
致します。

## 編集係

大谷津紫水  
久津美碧洋  
癸生川天遊  
吉田 景堂  
赤澤 豊